

あおもり経済

この人に聞く

福島漁業社長 福島 哲男さん



▲略歴(すべて歳月)
1941年、八戸市生まれ。64年、日大商学部卒業。65年、福島漁業に入社し常務、代表取締役専務を経て85年から社長。水産加工の惣宝水産(同市)社長のほか、興水産加工運送会長、八戸水産加工運送会長など多務める。91年から八戸商工会議所副会頭。

漁業が不可能になったのが大きな原因です。ただ、操業できなくなった時点で数量は減るだろうと言われていたので、それほど驚いていません。

漁業生き残りのカギは

資源管理とスリム化を

「減少続きの八戸港の水揚げが昨年、さらに大きく落ち込みましたね。型イカ釣り船、沖合底引船、二昨年の二十二万トンから十六万二千トン、二船団が二カ統です。大型十万吨を割りました。海船は一月中旬、フォークとみえていますか。外イカの主力漁場であるランド海域に出港し、アルゼンチン海域内でのた。夏ころまでに割当数量が少なくなりました。

「所有する船は、量を漁獲後、バルーに回が、アルゼンチンは今年に終わる予定で」
「作戦が難しく、今年の漁はどうなるか。今年漁はどのくらい制限されているか。今年漁はどのくらい制限されているか。今年漁はどのくらい制限されているか。」

「水揚げ減少、魚価低迷が厳しい状況が続いています。生き残り策は、NZが海外イカのみです。」
「NZが海外イカのみです。」

「八戸魚市場と八戸漁連の二つの調査業者が競い合うのは、かつては水揚げ増に効果的でした。競争はお互いが苦しむことになりまして、対気仙沼、対宮古というように他の漁港と競争力を持つ方がいいと思います。漁連の民事再生で統合協議は中断していますが、できるだけ早く決着すべき問題です。」

「作戦の立て方が難しいの程度管理が必要ですが、これからの議論によりますが、実行しなければなりません。」
「そのためには漁業者の意識も変えていかなければなりませんね。」
「漁獲可能量(TAC)制度によって、じわじわと変わりつつあります。輸入されるサバの多くを占めるノルウェーでは、三十年以上前から周辺国と協力し、漁獲時期や数量を厳しく規制していま



フォークランド沖へ向け、八戸港を出港する福島漁業の大型イカ釣り船「第58惣宝丸」=1月10日

(聞き手)八戸支社・竹内健一

「今後水揚げが増える要因がなく、昔のように八十万トン、九百億円になることは絶対ない。増産でしよう。」
「八戸港の将来は、決して暗いものではありません。整理統合すれば明るくなる要素はあります。犠牲を強いられる立場の人を当然出てきますが、それを乗り越えて努力していかなければなりません。」

「サンマ船の誘致などもししています。」
「八戸がイカ水揚げ日本一といっても、船主は少しでも高く買ってくれているから、逆に気仙沼のサンマを八戸に引張ってくるように、買う側の立場でも競争心を持つべきです。」